ISSN 0910−2396

野鳥だより

−北海道−

第 129 号

編集・発行　北海道野鳥愛護会

発行年月日　平成14年 9 月21日

ウミネコ

手前の鳥はトウネン、くわえているのはシャコ

2000. 8.31　小樽市新川河口　　撮影者　荒　木　良　一

〒007−0808　札幌市東区東苗穂 8 条 2 丁目 6 −11

もくじ

標識を付けたウミネコの情報募集中 …… 2
雁の中継地「長都沼(おさつぬま)」をとりまく諸問題（長都沼の雁カモを守る会）
佐藤ひろみ …… 3
ウトナイ湖野生鳥獣保護センター
盛田　徹 …… 8
札幌のクマタカ（札幌クマタカ友の会）
諸橋　淳 …… 10
霧多布の思い出　北山　政人 …… 12
カワウ営巣 道内初確認　－新聞情報から－ …… 12
探鳥会ほうこく …… 13
探鳥会あんない …… 15
鳥民だより …… 16

標識を付けたウミネコの情報募集中

北海道環境科学研究センター自然環境部と利尻島自然情報センター（代表：小杉和樹さん、愛護会会員）が中心となり、北海道にてカモメの１種のウミネコに標識を付け、北海道での繁殖地からの移動分散を調査しています。

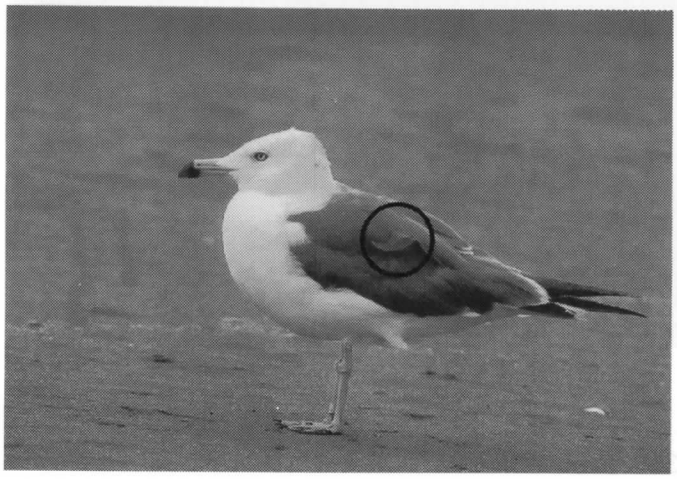
ウィングタッグ：丸いシートが翼上面に付けられています。2001年と2002年に利尻島・天売島にて装着されました。利尻島のは水色、天売島のは赤色です。シートには個体識別番号が書かれています。2001年は黒い４桁の文字と数字（利尻島「A001」～「A059」、天売島「A001」～「A150」)、2002年は５色（白・ラベンダー・黄・若草・紺）の２桁の数字（「00」～「99」）です。

カラーリング：1998年から利尻島、天売島、枝幸、奥尻島にて装着されました。左足には出生地を色で示したカラーリング（利尻島：赤、天売島：黄、枝幸目梨泊：緑、奥尻島：青)、右足には環境省鳥類標識調査の金属リングが装着されています。カラーリングには誕生年を示す記号（1998年～2002年まで順にA～E）が書かれています。ウィングタッグ装着個体も同様になっています。

見つけた場所、年月日、標識の色・記号（読み取れる範囲で)、その他何でも記録してお知らせ下さい。連絡先は以下です。質問等も受け付けています。

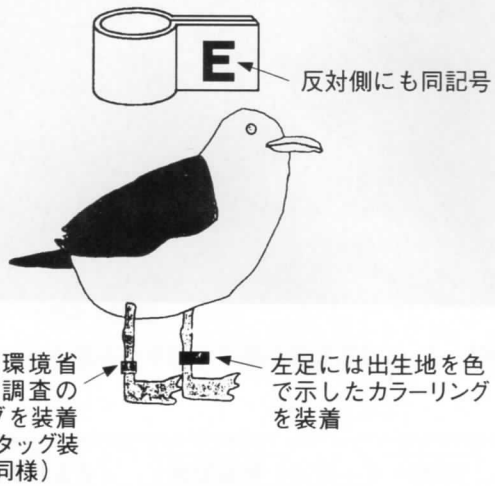
北海道環境科学研究センター自然環境部
（担当　長　雄一）
〒060－0819　札幌市北区北19条西12丁目
電話　011－747－3571
FAX　011－747－3254
電子メール　kamome@hokkaido-ies.go.jp

なお、上記センターのホームページ
（http://www.hokkaido-ies.go.jp）
に掲載されています。合わせてご覧下さい。



2002年８月24日　新川河口で撮影　赤タッグ装着個体
（写真　高橋良直）

カラーリングの形状



雁の中継地「長都沼(おさつぬま)」をとりまく諸問題

佐　藤　ひろみ（長都沼の雁カモを守る会）

はじめに

近年、道央の千歳市と長沼町にまたがる14号幹線排水路（通称・長都沼）を多数の雁類が中継地利用するようになりました。雁だけでなく渡りの季節にはたくさんのカモや白鳥たちも立ち寄ります。このことは野鳥だより121号に「わたしの探鳥地」として既に紹介されていますし、案内図も載っていますのでどうぞご参照ください。

2001年春のカウントでは、オオヒシクイ約1,700羽ほどの渡来が確認され、マガンの塒入りもピーク時には2万羽近くを数えました。このように春の渡来数は多いのですが、秋にはオオヒシクイ70羽ほどの群れを稀に見かけるのみでした。秋には雁はこの沼を利用しないのかも、とさえ思っていました。その原因と決めつけることはできませんが、2000年秋にハンターや猟犬を見かけたことからもわかるとおり、残念なことに長都沼ではまだカモ猟が行われているのです。驚くほど多数の雁が訪れる沼でありながら、まだ銃猟禁止区域に指定されていないのが現状です。

以前、長都沼で浚渫工事が実施された際に河畔林が伐採されてしまいました。長都沼の全長2kmのうち、じつに1.6kmもの長さに渡って河畔林が失われたのです。銃猟、河畔林伐採など雁にとって好ましくない環境が放置されたままであることを危惧して、雁観察をよくする有志が集まって「長都沼の雁カモを守る会」が結成されました。

カ　モ　猟

2001年秋には対岸からこちら道路側へ向けて発砲しているハンターがいて、千歳警察署から厳重な指導がありました。それを受けて、石狩支庁長からも通達が発せられています。その後は発砲が自粛されていた模様で、渡来する雁の数が増えだし、オオヒシクイは最大1,200羽を数えました。この数は、これまでの秋のデータとは全く異なるものであり、大きな驚きでした。カモ猟さえ行われなければ、長都沼には秋にも多くの雁の来ることが証明されたのです。地元の新聞等に紹介されたこともあり、周辺に住んでいる人たちも家族でたくさん来ていました。

時折、ハンターの姿を見かけることもありましたが、さすがに観察者がたくさんいる前では発砲できないようで、抑制効果があったようです。北海道も銃猟禁止区域指定に向けて動き出しましたので、皆さんも応援してください。

亜種ヒメシジュウカラガンが長都沼に飛来

亜種ヒメシジュウカラガン（右はマガン）

2001年11月10日、長都沼での雁カウント中にマガン4羽と行動を共にする亜種ヒメシジュウカラガン1羽をみつけました。特徴としては、マガンより小型、首の付け根の白い首輪がない、頭が丸みを帯びている、嘴が短いなどがあり、亜種シジュウカラガンとは区別することができます。スペースの関係上ここでは写真を提示する事は出来ませんが、両頬の白斑は顎の下でつながっていました。

日本鳥類目録（2000年、日本鳥学会、改訂第6版）によると過去に、本州（宮城1979年10月～1980年3月、神奈川1894年）で2例の記録があります。宮島沼付近にも過去に飛来していたという私信がありますが活字としての報告はこれまでありませんでした。11月15日にはそれまでウトナイ湖にいた亜種シジュウカラガン2羽が長都沼に移動してきて合流し、カナダガン3羽として行動を共にしていました。それまではマガン成鳥3羽、若鳥1羽と行動していたのですが同じカナダガン同士として認識し合ったのかと思うと少々興味深いものがあります。11月21日には2羽の亜種シジュウカラガンはいずこかに渡去してしまい、再びまた亜種ヒメシジュウカラガン1羽となりました。その後11月24日からはオジロワシがいたためか多くの雁とともにウトナイ湖へ移動してしまいました。その後ウトナイ湖では12月1日まで断続的に観察された後、静内町へ移動しマガンと共に越冬していたという愛護会会員の谷岡隆氏からの情報がありました。

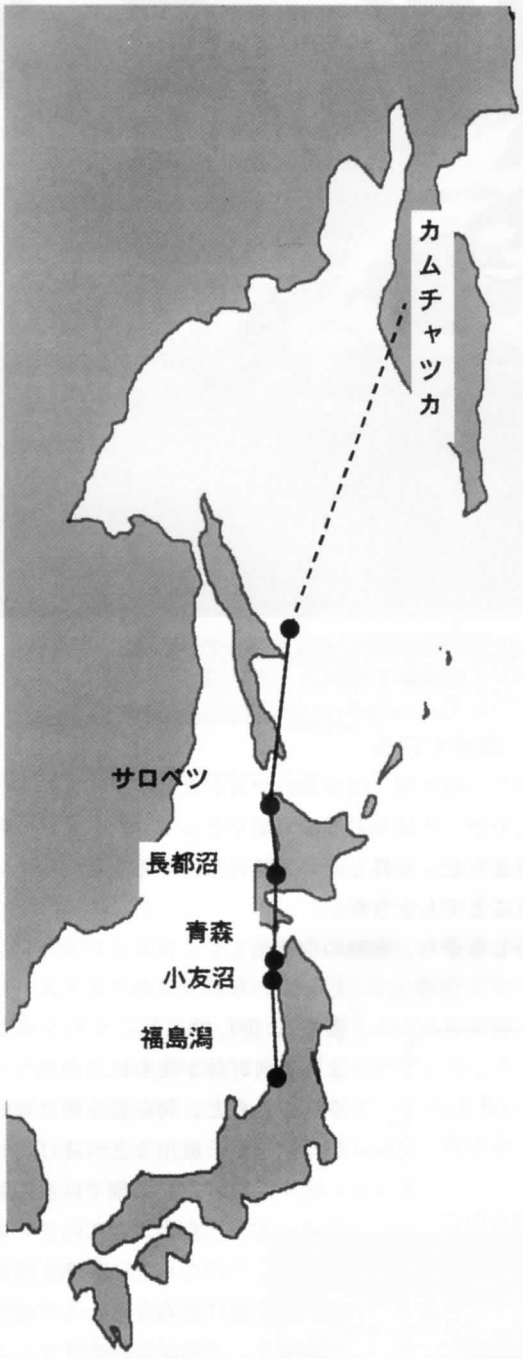
（写真・本文とも佐藤ひろみ）

表1　2001年秋期の長都沼における雁カウント情報

月日	時刻	オオヒシクイ	マガン	その他の雁など	カモ	白鳥(コ/オオ)	標識雁				備考
9月21日	8：45	9	0								
9月22日	16：00	24	0		80＋						
9月23日	11：30	28	3		120＋						
9月24日	16：30	34	3		120＋						
9月25日	17：50	43	3								
9月26日	12：30	34			150＋						
	16：30	46									
	17：30	48	3								
9月27日	17：40	53	3		80＋						
9月29日	12：30	71	29		150＋						
	17：30	89			150＋						
9月30日	17：50	89									
10月1日	12：30	0			20＋						ハンター7人
10月2日	17：40	8			50＋						
10月3日	17：40	6	3		20＋						
10月6日	16：00	0									
10月7日	10：00	0			12						ハンター2人以上
	17：30	12	1								
10月13日	17：30	170＋									ハンター1人
10月15日	12：30	0			60＋						
10月20日	6：45	0			6						対岸に車1台あり
	17：10	240＋				0/4					
10月21日	6：40	186		ハクガン成1若1							雁を保護する会の情報より
	10：40	190			6	6/16	K07				
	17：30	340									
10月24日	15：15	150				2/35	K07				
	15：50	350						K12			
10月26日	9：50	600				53	K07				
10月27日	9：30	410				5/33					
10月28日	9：00	557	3				K07	K12	P32		
	16：30	620					K07				
11月2日	6：00	620＋					K07				
11月3日	10：30	350＋									
11月4日	9：30	705	3		500	56	K07	K12	P32		マガモが多い
	15：30	830±	3			250				A16	
11月8日	11：00	1200±			210＋	70＋	K07	K12	P32	A16	
11月10日	8：30	805	成3若1	ヒメシジュウカラガン1	230	73	K07	K12			
11月11日	16：30	700＋				70＋	K07				
				ヒメシジュウカラガン1							
11月15日	14：10	729	13	ヒメ1＋シジュウカラガン2			K07				
11月17日	10：30	744	14	ヒメ1＋シジュウカラガン2	120	86	K07				
11月18日	12：30	797	19	ヒメ1＋シジュウカラガン2		46	K07				
	15：25	378	19	ヒメ1＋シジュウカラガン2		31	K07				
11月21日	14：00	364＋	3＋			79					
		帰雁あり	4	ヒメシジュウカラガン1							
11月24日	10：15	1			120＋	10					オジロワシ1
	11：00	1									
	15：30	110＋				80					
11月25日	8：15	3			100＋	24	K07				オジロワシ1
	16：00	20		オオヒシクイ300が上空通過							
12月1日	11：35	1			176	60					
12月8日	9：30	0				23					
	13：20	1									
12月9日	10：20	0				64					
12月16日	10：30	1			1	137					
12月17日	11：20	1			4	32					カイツブリ4

註1．標識雁K07、K12、P32は赤首輪　A16は黄色首輪
註2．11月15、17、18日はヒメシジュウカラガン1羽とシジュウカラガン2羽が飛来した
註3．＋の意味は「以上」、±は「前後」を表す

図1　オオヒシクイの渡りのルート



オオヒシクイの渡りのルート

日本にやってくるオオヒシクイの繁殖地を調査するため、雁を保護する会等が1999年2月に新潟県豊栄市福島潟で捕獲し黄色首輪と発信器をつけたオオヒシクイが長都沼にやってきました。人工衛星で追跡できたデータと観察記録、雁を保護する会の情報をまとめて書いてみますと、

2月2日	新潟県北蒲原郡豊浦町（福島潟）で捕獲し黄色首輪と発信器を装着する。
2月15日	秋田県八郎潟・小友沼で観察される。
3月16日	青森県の廻堰大溜池へ移動。
3月21日	北海道の長都沼でしばらく観察される。
3月27日	この4羽はサロベツへ移動する。しかしサロベツはまだ雪融けが進んでいなかったためか再び南下。
3月27日	長都沼で再び観察される（～4月2日まで)。このうちA33は上士幌町で落鳥、発見される。
4月18日	天塩町サロベツでふたたび観察される。
4月22日	発信器をつけているA24はサロベツを去り、サハリン東300kmに移動する。
5月2日	カムチャツカへ移動。
6月	調査団がカムチャツカにて初めてオオヒシクイの繁殖地を確認する。

長都沼に来た黄色首輪のオオシヒクイ（写真 長谷川富昭）
1999年3月24日 撮影

標識雁からわかること

長都沼はマガンやオオヒシクイの渡来数が多いだけではありません。希少雁であるハクガン２羽の他、2001年秋にはこの長都沼に亜種ヒメシジュウカラガン１羽がしばらく渡来していました。北海道初記録とのことです（コラム参照)。また、訪れた標識首輪をつけた雁からも多くの情報が得られています（標識雁のコラム参照)。

オオヒシクイはタイガで繁殖する鳥ですが、渡りの途中では長都沼やウトナイ湖などの湖沼で塒をとる他、河川やその流域の水田でも多数みかけます。標識首輪を確認しておくと、長都沼に立ち寄った雁がサロベツから直接来たのか、または空知地方から飛来したのか、そして十勝へ行くのか、あるいは本州へまっすぐに南下するのかが分かってきます。最終的には、東アジアにおける雁の渡りのルートの判明が楽しみです。

オオヒシクイ　写真にはA24、A27、A33、A34が写っています。
1999年３月24日（撮影 長谷川富昭）

危うい環境を守る

2000年の厳冬期には少数のマガンとヒシクイが越冬していましたが、千歳川の浅瀬で塒をとっていた、という私信もありました。条件しだいでは長都沼で冬を越す雁もいるということでしょうか。

しかしながら、雁類の中継地として長都沼の環境は必ずしもよいものではありません（図２参照)。少しでも近くで鳥を観察しようと河畔林が失われた裸地へ人々が入り込むと、神経質な雁は周辺の畑や水田や千歳川などへ逃げてしまいます。逃げた先の畑では麦の若芽を食べるなど食害が起こっているそうです。このため近い将来、防除されて雁が逃げ込めなくなる可能性もあります。天然記念物のオオヒシクイがこの長都沼を春秋に渡りのルートとして中継地利用しているのはまぎれもない事実です。雁が６万羽もやってくる宮島沼周辺の美唄市と北村では、食害を補償するという行政と農家の方々との話し合いが進みラムサール条約会議での登録に向けて大きく前進しています。時代は人と生き物とが共生をめざしていくという流れとなってきています。周辺自治体は早急に麦畑等の食害の規模を調査し、何らかの対策を打たねばな

長都沼に来る標識雁　井川マリジョ

雁につけられている標識には赤、白、青などさまざまな色があります。黄色は新潟でつけられたものですが、長都沼には黄色も来れば、赤や青も来ます。

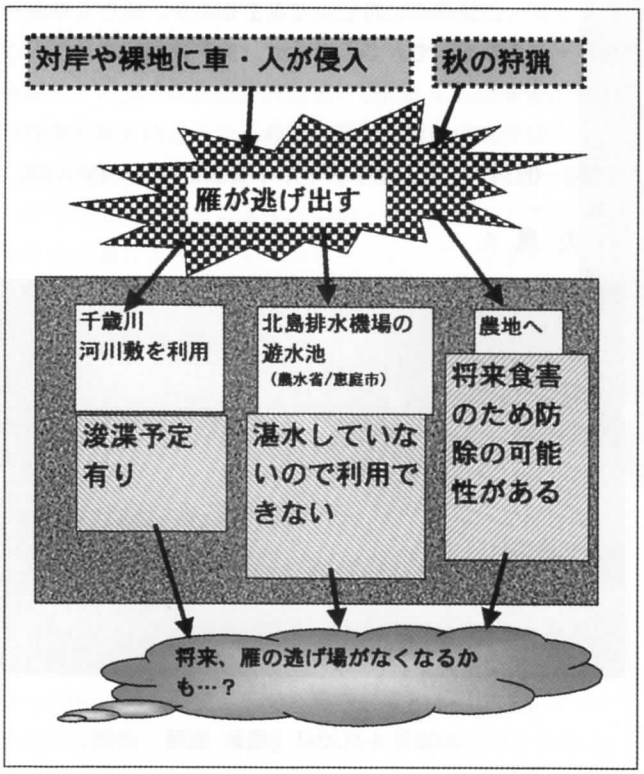
中には発信器がつけられたのもいて、これは渡りのルートを知るのに大いに役立ちます。でも、人間の目による観察も無視できません。

黄色のA16は、1997年11月に標識がつけられたのですが、長都沼では1999、2000年の３月に観察されています。

私が昨シーズンの2001年９月８日、A16をサロベツの牧草地で見た時には700羽の大きな群を作っていて、その中に標識P32とK14もいました。このP32は10月28日に長都沼で、K14は10月１日に十勝で観察されています。サロベツから南下のルートが分かれていると思われます。

A16はサロベツが気に入ったのか長居を決めこみ、11月４日まで残っていました。この日の午前７時58分、ちらちらとみぞれの降る中で神経質そうな様子に見えたのですが、なんと同日の午後３時30分に長都沼で観察したという報告が飛びこんできました。雁の飛翔時速は約80kmといわれていますから、サロベツから長都沼へまっすぐに飛んできたのでしょう。なんだか渡りの現場に立ち会ったみたいで感激しました。A16はその後、11月８日に長都沼で最後に観察され、12月22日には新潟の福島潟で確認されています。

図2　長都沼周辺における雁と人との関わ



らないでしょう。

長都沼はまだ銃猟禁止区域に指定されていませんので、狩猟の危険性もなくなった訳ではありません。それに、春にゴミ拾いをしたところ、対岸に280個もの薬莢が落ちていました。「野鳥」誌2001年5月号には長都沼でヒシクイ1羽が死体で回収され、死因を分析したところ銃弾（散弾）による失血死が原因であったと報じられていました。安心して羽を休めることのできる「長都沼」が欲しいものです。

長年、宮島沼や弁天沼などの鳥獣保護区指定について取り組まれている道議会議員の大橋　晃さまに伺ったところ、今年の1月9日に堀知事は「長都沼については2002年から狩猟にともなう危険の予防を図るため、道鳥獣保護事業計画の銃猟禁止区域に登載する」とされたそうです。やはり「銃猟禁止区域」あるいは「鳥獣保護区」として法律で銃猟を規制する必要があると考えています。

2002年3月16日と24日にはそれぞれ、約200羽のオオヒシクイが千歳川の河岸で羽を休めていました。開発工事が行われる前の、ごく自然な、川に依存して生きる本来の姿をみたように思いました。北海道開発局の千歳川河川事務所所長にお話を伺ったところ来年以降も順次、浚渫・掘削工事をする計画があり、オオヒシクイが羽を休めていた所は浚渫して取り除き、幅50～60mの、平らな川底の千歳川になるとのことでした。ありのままの川は蛇行があって、よどみや瀬があり、それぞれの環境を好む生き物たちがそれぞれに分散して生きていて当然です。生き物が本来好む環境を保全するよう配慮して、魚や鳥、人にやさしい水辺づくりを進めてゆくべきではないでしょうか。自然豊かな北海道といえども雁が飛来する河川はごく限られていて、この千歳川の他、鵡川、夕張川、十勝川、天塩川など数える程しかありません。雁が渡来するということは優れた環境が残っている証拠です。その長所を活かした多自然型の河川造りを是非とも進めてほしいと思います。

2002年2月には千歳川の治水対策案として「堤防強化案（遊水池を含む）」が打ち出されました。湿原としての環境への配慮を兼ね備えた遊水池を長都沼付近に築いてほしいと願っています。千歳川放水路計画の一部として利用される予定でもあった長都沼（14号幹線排水路）ですが大規模灌漑工事が始まる昭和35年ころまでは、あたりは馬追沼や（本来の）長都沼などが点在する湿地でした。

北海道のホームページでも公開されている「北海道レッドリスト（鳥類）」に照らし合わせてみると、絶滅危惧種（En）ではオジロワシ、オオワシの2種が、絶滅危惧種（Vu）ではシジュウカラガン、サカツラガン、ミコアイサ、オオタカ、ハイタカ、チュウヒ、ハヤブサの7種が、希少種（R）ではコクガン、マガン、ヒシクイ、ハクガン、コ

千歳川に舞い降りたオオヒシクイ230羽
2002年3月24日（撮影 佐藤ひろみ）

ハクチョウ、オシドリ、トモエガモ、ハイイロチュウヒ、シロハヤブサ、オオジシギ、セイタカシギ、シマアオジの12種を長都沼周辺で観察しており、優れた環境であることは明らかです。この長都沼には夏の繁殖期にも多くの草原性の鳥が来ています。かつて鶴が舞っていたという地名にふさわしい環境が甦ってほしいものです。

なにはともあれ、「撃たない・捨てない・近づかない」をモットーに長都沼に親しんでみませんか。私たちのホームページものぞいてみてください。アドレスは http://www3.ocn.ne.jp/～micchi/osatu/です。

〒062－0934　札幌市豊平区平岸4条2丁目3－15 A205

長都沼で見られた鳥たち

セイタカシギ（長都沼）
2002年4月14日（撮影 遠藤　美浩）

アマサギ（長都沼）
2002年4月20日（撮影 遠藤　美浩）

ウトナイ湖野生鳥獣保護センター

盛田　徹

野鳥愛護会の皆様こんにちわ。私はこの4月よりウトナイ湖野生鳥獣保護センターで傷病鳥獣の救護を担当しております盛田と申します。愛護会の会員ではありませんが、縁あって今回投稿させて戴く事になりましたので宜しくお願い致します。

一部の方は既にご存知の事と思いますが、簡単に自己紹介をさせて頂きます。実は、今年の3月まで海運関係の民間会社に勤務しておりましたが、余暇で日本野鳥の会苫小牧支部長、野生動物救護研究会副会長等を引き受け、バードウォッチングや写真撮影の傍ら、建物・電線・車、その上、農薬や鉛中毒、そして油汚染など、いわゆる人災で傷ついた野鳥の救護などを行っていました。自宅に小規模なリハビリ施設を建設し、現在まで取り扱った傷病鳥も120種を超えた経験を買われ、苫小牧市の職員としてセンター勤務をする事になった次第です。

さて、前置きが長くなりましたが、ウトナイ湖野生鳥獣保護センターは環境省が人と野生生物との共生を図れるようにと「野生鳥獣との共生環境整備事業」の国内第1号として建設され、環境省が建物の管理、苫小牧市が事業を行い、共同運営する施設です。

センター全景

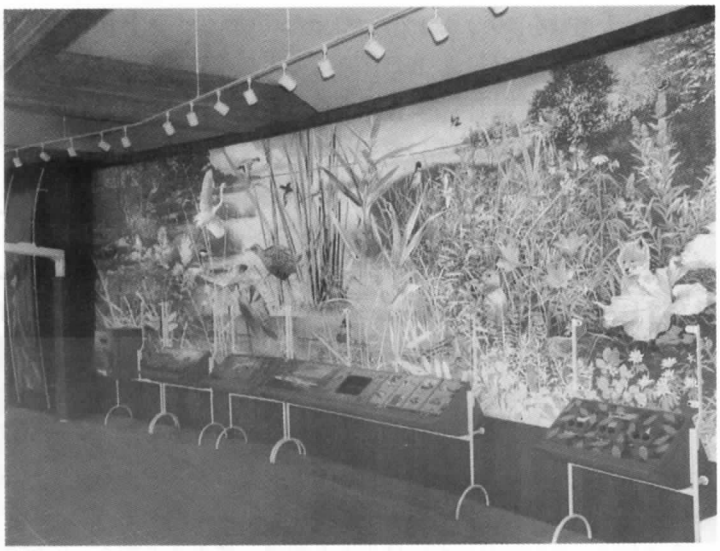
本センターは、鳥獣保護区のビジターセンター的機能を有し、貴重な野生鳥獣とその生育環境の保全を目的に、多くの人々に自然保護意識を普及啓発していく施設で、自然になじみの薄い利用者でも気軽に楽しめ、子どもから大人まで幅広い来館者が自然にふれあい親しみを持っていただくことが出来る施設を目指しております。展示ホールには

ウトナイ湖の生態系や渡り鳥の営み、生息環境などを数多くの展示や映像などで紹介するとともに、初心者でも自然観察を楽しむ方法などを分かりやすく解説しています。また、自然観察を通じて自然保護や野生鳥獣との適正なふれあいを図る普及啓発をはじめ、鳥獣保護区周辺における傷病鳥獣の救護、リハビリ等も行なっています。なお、外部施設としてウトナイ湖の自然に直接ふれあえるよう、センターから湖岸沿いにネイチャーセンター周辺まで、自然観察路（一部木道及びバリアフリー対応）、木製テラス、東屋、観察小屋も設置しております。

センター設立の目的などの概略について説明申し上げましたが、各施設についても若干説明させていただきます。まず、センターの場所ですが、旧ウトナイ湖レイクホテル跡地（日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリのネイチャーセンター入口より苫小牧方向に約1㎞）で国道36号線沿いに建設され、交通アクセス（車）は札幌から90分、千歳空港から15分、苫小牧東インターからは10分程度と思われます。敷地面積は2ヘクタールです。建物は木造2階建て約1,500㎡で、壁はカラマツ、床はナラ、窓枠はトドマツと、北海道産木材を多用しております。駐車場は排水性舗装で普通車68、バス6、身障者用5台、その他に駐輪場も設置されております。

1階は苫小牧市の事務室、展示ホール、レクチャールーム、ボランティアルーム、傷病鳥獣診療室・収容室で、リハビリ用ケージ（15×5×4ｍ）が隣接しております。また、特筆されるのは診療室に海鳥の油汚染洗浄用シンクを2基設置してもらえたので、多くの方に技術をマスター願えればと思っております。その他にはトイレ、湖と森の休憩所があります。

展示内容ですが、ウトナイの生態系を春夏・秋冬に分けて大画面の描画で表現し、野鳥の求愛・採餌方法や、昆虫、風、水、動物を介した植物の種子散布戦略、昆虫達の興味深い越冬方法、動物達の様々な冬眠方法などを紹介しています。他にもウエットランド（湿原）の歴史や働き、泥炭積層、森の保水能力、渡り鳥の種類や滞在時季のカレンダー、渡りのルート、ラムサール条約の意義、ウトナイ湖と周辺の環境変化の様子なども紹介されています。また、視覚、聴覚、嗅覚、触覚などを通して自然観察の方法を学べるようにもなっており、一般の方が利用できる手作り作品展示コーナーもあります。レクチャールーム（約90人収容）では150インチの大型スクリーンにより「ウトナイ湖、水と生命の営み（20分）」が上映でき、また、機材を使用しての講座や研修会を開催することもできます。



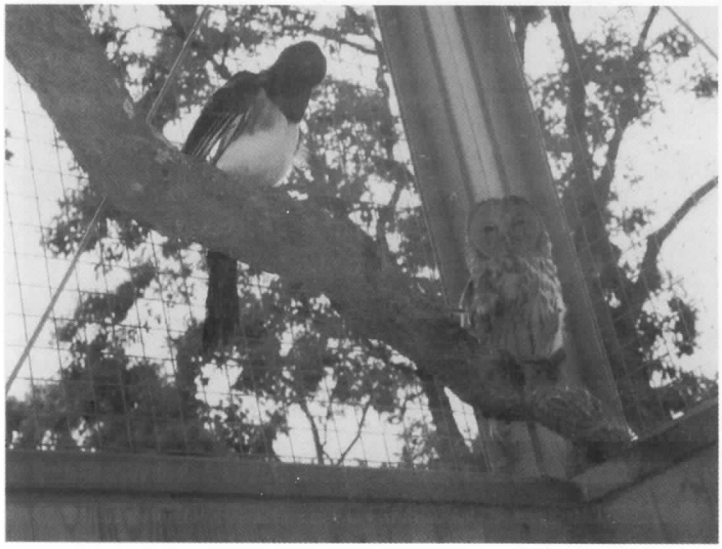
展示ホール描画

2階部分は多目的室（小会議や、小物の工作）、市民ギャラリー（写真や絵画の展示）、休憩室（7.5㎡×2部屋）、環境省北海道道西事務所苫小牧支所となっております。

開館時間は午前9時～午後5時、閉館日は毎週月曜日です（月曜日が休日の場合、火曜日）。スタッフは苫小牧市の職員3名と業務委託をお願いしている日本野鳥の会レンジャー1名ですが、7月28日のオープンは約1,000人、以後、夏休みのせいか1日平均400人程度の来館者で盛況を呈しており、少ないスタッフでの対応で多忙を極めている現状です。

一方、傷病鳥獣救護業務は、昨年まで苫小牧市が行っていた業務をそっくり鳥獣保護センターに移行し、鳥獣保護区内及びその周辺（苫小牧市の行政区域内のみ）で保護された鳥獣の救護と限定してはいるものの、特別天然記念物等を除き、国設鳥獣保護区における環境省の傷病鳥獣保護施設は初めての建設であり、マスコミの興味を引き、オープン前からテレビや新聞で報道されたので、紹介や持込みが多く対応に苦慮している現状です。

昨年1年間の苫小牧市における保護件数（カラス・



保護されたカササギとフクロウ

ドバト、大型獣を除く）は103件でしたが、今年は４月10日から受け入れを開始し、８月10日迄の４ケ月間で既に36種80羽を数え、救護担当者は私一人とボランティア頼みで休暇も取れず、この先が思いやられます。特に今年はヒナと幼鳥の持込みが多く、コヨシキリ４羽、ノゴマ４羽、ハクセキレイの巣内雛３羽、スズメ、センダイムシクイ、カモメ類、カモ類と続きました。原因は草刈や樹木の移植で巣を壊した、飛べないので保護したと言う誘拐まがいが多く、中には「以前飼育した事があるので友人が巣内雛を持ってきたが手間がかかるので引き取れ、引き取らないなら猫の餌にするぞ」などと言うとんでもない話もありました。一般的には、保護した本人の「良い事をした！」という思い違いによる人災が圧倒的原因ではないでしょうか。

飛べない、自力で食べないは当たり前で、淡水カモ類を除き自力で採餌できる種は少なく、30分から１時間おきに早朝から夜まで給餌をしなければなりません。口を開けないヒナには強制的に口を開けて給餌をしなければなりませんし、大きくしてやる事は出来ても野生復帰に重要な学習をさせることは困難です。また、あるとき何かに衝突し下顎が前方に変位したオオタカの幼鳥が、治療した獣医によって噛み合わせの関係で下嘴の先端を削られ、センターへ運びこまれました。その後センターで下顎を正常の位置に戻しテーピングしましたが、削られた分だけテーピングがしずらく苦労しました。幸い２週間ほどのテーピングで肉を引きちぎるほどに回復しましたが、これも生態を熟知しておれば削らずにすんだと思われます。

前述のような事が多く、救護関係者を含めた市民への普及啓発がこれからの課題と思われてなりません。現在まで手掛けた80羽のうち、野生復帰できたのは41羽、リハビリ中17羽（タヌキの幼獣１頭を含め野生復帰可能な個体は15個体）、死亡22羽となっており、何とか野生復帰率は目標の５割をキープしておりますが、これからも皆様の協力を頂きながら努力して参りますので、宜しくお願い致します。

粗雑な原稿となりましたが、施設は十分お楽しみ頂けると思っておりますので、是非、一度足を運んでいただけたらと思います。なお、傷病鳥収容施設は一般開放をしておりませんが、救護に興味のお持ちの方は声を掛けていただければ、お見せする事が可能です。

札幌のクマタカ

札幌クマタカ友の会　諸橋　淳

初めまして。札幌クマタカ友の会の諸橋と申します。現在メンバーは10名にも満たない小さな会です。会の発足のきっかけは、以前からクマタカの観察フィールドを持ちたいと常々メンバーと話しており、2000年の４月より会を立ち上げ、継続した観察を実施しています。

また、2001年には北海道新聞社の野生生物保護基金の助成を受ける事が出来、観察のための備品類を充実させ、より効率的な観察を実施する体制が整いました。

さて、クマタカについて皆さんはどんなイメージをお持ちでしょうか。図鑑などを見ると、スリランカ、インド南部、ネパール、インドシナ半島、台湾、中国東南部、日本等に分布し繁殖しています。分布を見てお解りの通り、熱帯から温帯にかけて生息している南方系のタカであり、北海道はその北限に位置しています。

環境省及び北海道が作成した「絶滅のおそれのある野生動物－レッドリスト－」のいずれにも絶滅危惧種に選定されています。絶滅危惧種と聞かされると非常に数が少ない禽で、山地に広がる原生林に密かに生息している様に想像する人も多いかと思います。

しかし、実際札幌のクマタカを観察してみると、以外に人の生活圏の近くにその姿を観ることも多く、里山の鳥とまで身近ではないにしろ縁遠い鳥ではないのです。ただ、クマタカの生態の特殊性が人の目に映りにくくしているの

クマタカ成鳥

も事実です。

クマタカを見た事のある方はどうでしょう。これまでに何回くらい観る事が出来ましたか。毎年見ていると言う方はクマタカとの相性がいいと思います。中には何年も鳥を見ているけれど、まだ一度も見たことが無い方も以外に多いのではないでしょうか。

猛禽類全般についても言えますが、歩きながらのウォッチングではなかなか猛禽類を見る機会が少ない事はみなさん経験的に感じていると思います。それでも上空を見上げるとノスリやハイタカ、オオタカが飛んでいた経験をお持ちだと思いますが、いまあげた種ですらクマタカに比べると、上空を飛ぶ頻度が高いのです。ある文献では、クマタカの日中の飛行率は5％未満という数字があります。この数値からも、いかに飛ばない猛禽であるかがうかがえます。一日のほとんどを森林内で行動し、狩もほとんどが枝等に止まって獲物が来るのを待つ「待ち伏せ型」です。観察例でも、7時間ほとんど移動せず樹上に止まったまま待ち続け、獲物を見つけると飛び立ち急降下します。この時は狩に失敗し、同じ場所に止まり待ち続ける行動が観られています。

このように書いてしまうと姿を観るのがすごく難しい猛禽のように思えてきたことでしょう。確かに難しいのですが、比較的上空に舞い上がる時間帯も実はあるのです。気温が上がり上昇気流が発生する時間帯がそうで、昼を挟む2・3時間の時間帯に、上昇し移動する姿を観る頻度が高い傾向があります。観察する時間帯のポイントとしていただければと思います。時には、観察地点の真上を旋回し、尾羽の太く黒い横帯や翼のタカ斑模様が、はっきりと確認出来る程、近い距離で観られた時の姿は、タカの名を持ってはいますが、やはり「山ワシ」と呼びたくなるような威厳と格好良さに、出なかった観察時間の苦労も吹き飛ぶ気がします。

では、実際どんな観察を行っているのかを紹介します。現在の目的は、札幌の森林地域に生息するクマタカの個体数を把握することを第一の目的としています。観察地域は札幌の南西部、定山渓を含む20km四方の観察区域を設けています。観察方法としては定点観察が主です。観察には、定点を出来るだけ複数地点設けて同時に実施します。観察時間は最低5時間とし、数日間連続する様にしています。理由は先にも書きましたが、森林潜行型でいつ何処に出てくるか予測が難しい事と、広い地域を観察する事で複数個体の出現の有無や同じ個体を連続して追跡を可能とするためです。同時に個体識別のため雌雄や成鳥、幼鳥の判断、羽色、翼や尾羽の欠損等、特徴を出来る限り収集し、こうした観察をほぼ通年実施しています。

これまでの観察から、札幌の南西部の森林地域にクマタカが生息繁殖していることが確認されました。しかし、生息個体数については一番個体識別が進んだ年で13羽を確認していますが、年ごとに確認した羽数の差も大きく、個体数や番の数については現状では予想される数値は出来ていません。営巣地については、確認した2カ所の巣は、大径木の点在する天然林の広がる谷の急傾斜地にあり、巣は全て広葉樹の大木に作られていました。巣の最も大きいものは、巣の幅が1m以上あり厚みも40cmを越え、数年間継続して使用している事が考えられます。クマタカの繁殖については、文献などから毎年繁殖するもの、1年おきなど間隔を開けて繁殖するものなどの記載があります。札幌のクマタカについては2001年に繁殖の成功が確認されています。繁殖サイクルについては観察年数が短いため解ってはいません。また雄、雌、番の行動範囲などについても、定点観察では断片的な行動しか捉えていません。大半の時間を過ごす林内の行動については今後別の方法を考える必要があるかもしれません。以上のようにまだまだ解らない事の方が多く、観察段階としてはスタートラインに立つ所まで来たと言うのが現状です。これから個々の目的を解明するため気長にそして楽しく続けていきたいと考えています。

クマタカ幼鳥

〒060－0807
札幌市北区北7条西5丁目ストークマンション704
自然ウォッチングセンター内　札幌クマタカ友の会

霧多布の思い出

北山政人

鳥に興味を持ち始めた頃から道東に是非とも行ってみたい、と本気で思っていました。人から行くことを薦められた訳ではなく、鳥や自然に関する様々な本に眼を通しているうちに、ごく自然にそうなったのです。北海道の東部といっても漠然としたものがありますが、私がいちばん憧れたのは根室周辺です。でもなかなか出かける機会はなくて、実際に行く事ができたのは今から7年前のことでした。その後も何度も行きました。もちろん楽しい思い出ばかりです。シマフクロウを見れた時の感動は言葉では言い表せないです。納沙布岬にいたコケワタガモの群れは偶然にもかなり近くに寄って来てくれました。走古丹のヒメハジロの雄の頭部の色彩はとても綺麗でした。これらの記録を詰め込んだフィールドノートは私にとっての宝物といったところでしょうか。

1995年の8月の事です。主に春国岱を中心に鳥見をしていました。シギ、チドリ類がまとまって入り始めていました。キアシシギの数が非常に多く、100羽前後の群れが湿地帯の倒木の上で休んでいる場面もありました。この時、僅かな時間でしたが、浜中町の霧多布に行く事ができました。もちろん初めての事です。幸運にも天候に恵まれました。まったく霧がなく海上の鳥たちを探すのには最高の状態です。期待していたのはもちろんエトピリカです。すでに、この時、霧多布岬の先端部、正しくは湯沸岬での繁殖は確認されてはおらず、以前のように至近距離で見ることは困難になっていました。ただし毘琶瀬湾を望むアゼチ岬の沖の小島では毎年確認されています。それでも湯沸岬にも行きました。ケイマフリを見ることはできました。やはりお目当てのエトピリカは確認できません。やはりアゼチ岬に期待！という事でそちらの方に行きます。着いてすぐにウトウの群れが見れました。ガスがかかる気配もなく、視界は極めて良好です。そしてついに幸運にもエトピリカに会う事ができました。3羽数えることができました。距離はかなりありましたが、嬉しかったです。エトピリカに会えた事だけでなく私はこの時、霧多布の雰囲気もすっかり気に入ってしまいました。また来たいと思ったのです。その後も何度か霧多布に行く事ができました。根室行く前には必ず立ち寄りました。時には根室周辺よりも霧多布で過ごす時間の方が多くなったのです。

4月の末に霧多布に行った時の事です。湿原の奥に広がる山林では渡ってきたばかりのコマドリがとても見やすかったのが印象的です。まだ草や葉が茂る前なので地面の近くにいても発見が容易です。同じ時期、根室の温根別川付近の林道でもコマドリが見つけやすかったです。姿をじっくりと、しかも何度も見れたのはこの時がいちばんでした。12月の末に行った時はウミスズメ類やアビ類、カイツブリ類がかなり楽しめました。コオリガモの多さも実感できました。

〒063－0801　札幌市西区二十四軒2条6丁目1－31

－新聞情報から－

カワウ営巣　道内初確認

北海道新聞2002年7月28日朝刊に、幌延町（留萌管内）でカワウが営巣していることが道内で初めて確認されたという記事が、樹上の巣で親が子に餌を与えている写真とともに掲載された。記事によると、同町在住の写真家の富士元寿彦さんにより、昨年（2001年）春に約30羽が同町内のヤナギの繁る雑木林で、樹上に数個の巣を造っているのが発見され、今年は約300羽が4月中旬に飛来、巣は100近くに増え、5月下旬から孵化、7月中旬から巣立ちが始まったことが確認されたとのことである。

カワウは本州方面では普通に見られる鳥であるが、過去において、北海道では極めて少数が散発的に観察される程度であった。しかしながら、1999年4月に、石狩管内の石狩川と篠津川の合流点で最大100羽の群れが観察され、その後毎年、同時期に同所で群れが確認されている（野鳥だより第120号参照）。その群れがどこから来て、どこへ行くかは何もわかっていなく、今回の幌延町での繁殖確認との関連も不明であるが、北海道でもカワウは決してまれな鳥ではない状況になってきている。

同記事中には、日本野鳥の会自然保護室の研究員による、『道北という場所から見て、大陸から来た可能性も考えられる。ＤＮＡ鑑定など詳しく調査し、由来などを調べたい』というコメントが加えられている。本州の個体群が繁殖分

布を北海道まで拡げてきたものか、あるいは大陸から渡ってきたものか、結論が待ち遠しいところであるが、いずれにしろ道内で繁殖が確認されたことは大きな出来事である。

付け加えておかなければならないが、道内でのカワウの今後の動向については注意を傾ける必要がある。本州各地ではカワウ問題が近年大きく取り上げられている。カワウの増加に伴って、漁業被害や糞害などが大きくなり、害鳥とみなされる状況にもなってきている。昨年、今年と幌延町で確認されたカワウのコロニーが将来的にさらに拡大したり、道内の他地域に分散したりして、カワウが増加していくと、本州と同じような問題が起こってくるかもしれない。新しい地を求めてどこからかやってきたカワウと、北海道の人たちがうまく共生できるような作戦を、将来に備えて考えておくべきかもしれない。

文責・広報部

鵡川探鳥会に参加して

2002. 5.19

梅 津 譲 一

今回の探鳥会参加は何回目であろうか。右岸はここ何日か行っていないので楽しみにしていた。鵡川から私も含め４名の参加があった。総勢25名ほど。コースはいつもの通り牧場内を通り岸辺に沿っていくコース。昨年と同じく人工干潟にも行くことに。牧場に入って間もなくフィールドスコープの中のコチドリが愛くるしかった。借りて見たのだが、やはりフィールドスコープも必要かな、と実感。しかし年金生活者の自分にはちょっと無理かな、と思いながら歩いていくと突然声が上がる。コチドリの卵を見つけたという。みんな近寄って見ると４個の卵があるではないか！先ほどのコチドリの卵に違いない。そして驚いたことに、なんと20センチほどのところ（15センチ位だったか？）にはわれわれの靴跡があった。危うく卵を踏むところであった。間一髪で踏まずに済んだのだ。踏まれないように周りに４本、棒を立てた。はじめ近すぎたのですこし離れて立て、そこから立ち去った。しばらく離れてから三人で双眼鏡やフィールドスコープで見ていると、親と思われるコチドリが帰ってきた。しばらく待っていたが、４本のくいに囲まれた中になかなか入ろうとしない。結局われわれは先を急ぐことになったが、周りを行きつ戻りつするだけの親鳥の姿がいつまでも脳裏から離れることがなかった。われわれは双眼鏡やフィールドスコープを持って鳥を求めているが、足元に注意しているであろうか？知らないうちに鳥たちの環境に危害を加えていないであろうか？そもそもこの地帯に入り込むことがいいのだろうか？棒くいを立てたこともよかったのだろうか？この日25種の野鳥が観察され、自分としてもホウロクシギを見ることができたのはうれしかったけれども、この日の出来事には深く考えさせられた。人工干潟が作られ、遊歩道もついた。観察は遊歩道からだけにするべきではないのか？そうでなければ遊歩道が作られた意味がないのではないかと思われる。今、豊かな河口を取り戻すためさまざまな取り組みがあり、砂嘴も順調に延びてきた。右岸の様子は確実に変わりつつある。もっとその方面にも関心を持って欲しいことを付け加えて感想とします。

豊かな河口環境あってこその野鳥たちなのであるから。

〒054－0051　勇払郡鵡川町文京町３丁目55

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、マガモ、カルガモ、コチドリ、シロチドリ、チュウシャクシギ、ホウロクシギ、キアシシギ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ドバト

以上　25種

【参加者】相田、逸見トモ子、岩崎孝博、梅津譲一、大荒田忠良、岡田幹夫、小山内恵子、門村徳男、蒲澤鉄太郎・則子、小堀煌治、佐藤幸典、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、高橋良直、道場　優、成澤里美、樋口孝城、松原寛直・敏子、山口和夫、山田良造、山下　茂　　以上　24名

【担当幹事】樋口孝城

植苗・ウトナイ探鳥会に参加して

2002. 6. 2　山 口 和 夫

北海道野鳥愛護会に入会させて頂き２年が過ぎました。

従来より野鳥に興味を持っており、10年程前よりバードカービングを始めました。

興味があっても、どのような習性、環境下でよく見かけられるのか又実物の大きさ色彩等を自分自身で確認できる場として入会させて頂きました、諸先輩の方々に温かく迎え入れて頂きました事について深く感謝致して下おります。

表題の件についてですが、諸先輩の方々に植苗・ウトナイではシマアオジは例年いつでも今の時期見られるとの事で期待を持って参加致しました。

６月２日、当日は、あいにくの雨の中自宅を出発し集合場所である植苗駅に向かいますが一向に雨の収まる様子も無く今日は中止になるのではと思いつつ目的地を目指します。

当駅に到着すると、すでに先着の方もおり次々と参加者が集合してきて、20数名の方が定刻に探鳥会に出発する事になりましたが、雨の中、カッパ着用、傘をさしての出発となり、今日は探聴会で終わるのかなーとの声もありましたが（傘に当る雨音より力強い小鳥の鳴き声）林道を抜ける頃雨具の必要の無い様に雨も上がって来ました。

雨も上がり、鳥たちが湧くように出てきて欲しいと願いつつ美々川を目指しました。

上空をオオジシギが舞い、コヨシキリの鳴き声で迎えられて、念願であるシマアオジを見れる事が出来る予感がしましたが、残念ながら私には声すら確認出来ませんでした。

鳥合せの時にシマアオジが確認された事を報告されて、愕然となりました、鳥の囀りが識別できず、漠然と姿だけを見ていただけと思い知らされせました。

鳥の囀りが分かることで探鳥会がより楽しいものになると確信致したしました。

34種もの鳥が確認出来た中、私には自分の目で確認した数種とわずかに聞覚えのある３～４種とのありさまでしたが、今後共、探鳥会に参加させて頂き、探聴にも対応出来るように努めたいと思っておりますので今後とも宜しくお願い致します。

日頃より感じている事ですが、当日の担当幹事さん始め、役員の方々におかれましてはこの様な機会を与えてくれました事、本当の有難うございます。

いまだ平和の滝、福移には参加しておりませんが、来年度はぜひ参加させて頂き愛護会の全コースを走破したいと思っております。

〒067－0032　江別市元江別849－14

【記録された鳥】アオサギ、トビ、コブハクチョウ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、コゲラ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、シジュウカラ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上　34種

【参加者】石田典也、岩崎孝博、岡田幹夫、亀井厚子、川村宜子、小山、後藤義民、武内　強、高橋利道、高橋成人、高橋良直、樋口孝城、細谷博次、細谷和子、松原寛直・敏子、村上トヨ、矢野玲子、山口和夫、山本昌子、横山加奈子

以上　21名

【担当幹事】竹内　強、樋口孝城

東米里探鳥会に参加して

2002. 6. 9　横　山　加奈子

バードウォッチングをはじめてから数年たちますが、今迄草原の鳥をじっくり見た事は数少なく、今日は何か新しい発見があるかなと、さわやかな風の吹くなかをはじめて東米里の観察会に参加しました。

第一の観察ポイントは川原より少し入った、開けた所です。ここではヒバリ、ノビタキが草地を出たり入ったりしています。私の予想リストに入っていなかったコチドリが、営巣中らしく盛んに飛び出して近く迄寄って来る。白黒のキリッとした顔に目のまわりの黄色のリングもよく見える。今迄、水辺に近い所でしか見た事がなかったので、ベテランの方の石の上の巣や卵の話を興味深く聞きました。

第２ポイントの厚別川の堤防では、オオヨシキリ、コヨシキリのにぎやかな声が聞こえるが、残念ながら姿は見えない。聞きなしはむずかしくなかなか覚えられないが、この時とばかり“行々子、行々子”の声をしっかりと記憶にとどめる。

札幌市内でカッコウの声が聞こえる所が少なくなってきているが、ここでは間近で聞くことが出来、特徴のある飛び方も見る事が出来た。

今回の観察会ではスコープ持参の方が沢山いらして、コチドリやホオアカ等あちこちのスコープを見せてもらい、違う角度から細かく観察ができました。

何回も参加している方が、来るたびに建物が増えていて、観察場所が少なくなっていると言っていましたが、市内で身近に草原の鳥が見られる場所として、是非いつまでも残って欲しいと思いました。

〒002－8026　札幌市北区篠路６条５丁目６－20

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、コチドリ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上　27種

【参加者】赤沼礼子、五十嵐加代子、石田典也、板田孝弘、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、岡田幹夫、川村宜子、北村　覚、栗林宏三、小堀煌治、小山久一、佐々木朋栄、志田秋子、島田芳郎・陽子、瀬賀勝人、高栗　勇、田宮ひろ子、道場　優・信子、富永まさえ、中正憲佶・弘子、原美保、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、三船喜克・幸子、安　真一郎、山形裕規、山口和夫、山田良造、吉田慶子、横田通典、横山加奈子、渡辺紀久雄、渡辺吉宗

以上　41名

【担当幹事】渡辺紀久雄、栗林宏三

平和の滝探鳥会

2002. 6.15

【記録された鳥】マガモ、ヤマシギ、キジバト、ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、マミジロ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、アオジ、クロジ、シメ、ヤブサメ　以上　20種

【参加者】岩崎孝博、石田典也、井上公雄、川村宜子、北山政人、栗林宏三、小山久一、佐藤幸典、島田芳郎・陽子、関口健一、高橋良直、武沢和義、出口政治、戸津高保・以知子、丸山智司・美知子、森田崇司、山形裕規、山田甚一　以上　21名

【担当幹事】井上公雄、栗林宏三

福移探鳥会にて

2002. 7. 7　竹中宏二

黒い頭に白い腹、橙の胸に澄んだ声、雨の中高らかにさえずるノビタキを見つめながら、私は三ヶ月前の誓いを新たにしていました。

今年の春のことです。私は某道外大学入学案内用パンフレットを前に、一年後には旅立つ札幌(ふるさと)の魅力を数えていました。が、しかし……

「まず時計台でしょ、それからラーメン、あとは…うーん…。」

これでは観光ガイドマップの棒読みではありませんか。遠くやんばるのすばらしさなら両手に余る程知っているのに、生まれ育った土地を語ることもできないなんて。かくして私はこの一年を「札幌(ふるさと)の魅力を学ぶ年間」と定め、ひるまず野山へ飛び出してゆくことを誓ったのでした。

あれから三ヶ月、本日の探鳥会は雨天決行、しかし会の皆さんに促されてスコープを覗くとそこには降りしきる雨をものともせずさえずり続けるノビタキやカッコウの姿がありました。その瞬間私はテレビのやんばる特集にも観光ガイドマップにもない札幌(ふるさと)の魅力を堪能しました。目の前の鳥たちと同じ大地に立ち、同じ雨に濡れていることが嬉しくてならなかったのです。

ペーパーバードウォッチャーの私を札幌市民にしてくださった会の皆さんに感謝します。そして来年の春にはさらに誇り高く札幌(ふるさと)の魅力を語る某道外大学生が誕生していることでしょう。

〒062－0055　札幌市豊平区月寒５条15丁目12－９

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシブトガラス　以上　24種

【参加者】石田典也、岩崎孝博、岡田幹夫、川村宜子、栗林宏三、小山久一、橋爪陽子、高橋利道、高橋良直、竹中宏二、道場　優・信子、島田芳郎・陽子、樋口孝城、松原寛直・敏子、山田良造　以上　18名

【担当幹事】道場　優、岩崎孝博

【宮島沼】　2002年10月13日（日）

春は北へ秋は南へマガンの渡りはこの宮島沼を中継地として繰り広げられています。秋はユーラシア大陸の北東地域で夏を過ごし繁殖を終え、９月下旬頃から渡来がはじまりこの時季にピークに達します。春と異なり秋は滞在期間が短く、休憩をとると順次越冬地を目指して飛び立っていきますので、春ほどの大群にはなりませんが、それでもピークには２～３万羽になります。他にハクチョウ、カイツブリ、各種カモ類やオオタカ、ハヤブサなどの猛禽類、時にはオグロシギ、ツルシギ、トウネンなどのシギ・チドリ類が観察されることもあります。

集　合＝大富会館前（沼側）　午前10時

交　通＝ＪＲ岩見沢駅前バスターミナル発「中央バス月形行き」大富農協前下車　徒歩約10分

【野幌森林公園】　2002年10月20日（日）

高山からはじまった紅葉も、中腹から麓へと広がり秋の深まりを感じる季節です。繁殖を終えた鳥たちの中には、早々に南に移動をはじめるものもあり、秋は春とともに渡りのシーズンです。春から夏へと森を賑わしたオオルリ、キビタキ、センダイムシクイなどの夏鳥もいつの間にか姿を消し、ツグミ、キレンジャクなどの冬鳥たちが姿を見せはじめています。深まり行く秋に落ち葉を踏みしめ、樹の葉の彩りや香り実など、季節がもたらす自然を実感しながら、キツツキ・カラ類などの留鳥に、渡り遅れの夏鳥や、姿を見せはじめた冬鳥などの観察に一日を過ごしてみませんか。

集　合＝大沢駐車場入口　午前９時

交　通＝夕鉄バス（文京台線）新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢公園下車　徒歩５分

【ウトナイ湖】 2002年11月10日（日）

愛護会がここで探鳥会をはじめて30年以上になりました。多くの人たちがこのウトナイ湖を通して鳥との関わりを深めたことでしょう。この時季になりますとほとんどのカモ類が美しい姿で迎えてくれます。

岸辺に集まるハクチョウにオナガガモ、湖面を泳ぎ回るヒドリガモ、ヨシガモ、ミコアイサ、カワアイサ、奥の方にはマガン、ヒシクイなどが群れ、オジロワシ、オオタカ、ハヤブサなども良く見かけられます。寒い時季ですので防寒には十分気をつけて参加しましょう。

集　合＝ウトナイ湖畔駐車場湖畔側　9時30分

交　通＝新千歳空港発　道南バス苫小牧行き、ウトナイレイクランド下車

【野幌森林公園】 2002年12月1日（日）

樹の葉も落ち見通しも良くなり、その年によっては根雪になり森は冬の眠りに入るころでしょうか。

キツツキ・カラ類などの留鳥とツグミ、レンジャクなどの冬鳥に、カケス、ウソ、シメなどが主な鳥たちになります。オオタカ、ハイタカ、フクロウなどのほか歩いて見ると意外な出会いが楽しませてくれます。

集　合＝大沢駐車場入口　9時

【野幌森林公園を歩きましょう】

10月6日（日）·11月3日（日）

集　合＝大沢駐車場入口　9時

交　通＝夕鉄バス（文京台線）新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢公園下車　徒歩5分

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

☆観察用具、図鑑、筆記用具、昼食、雨具などお持ちください。

☆探鳥会の問い合わせは

011－563－5158　白澤さん宅へ

☆　☆　☆

鳥民だより

野鳥カレンダーの販売

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。印刷予定部数は、70部で **価格は1部1,200円**です。早めにお申込み下さい。

お渡しは、11月のウトナイ湖と12月の野幌探鳥会になります。

申込み時に受取る場所もお知らせ下さい。

申込先　戸津　831－8636

小堀　591－2836

☆☆☆ 会員名簿 ☆☆☆

【新しく会員になられた方】

柳川　巌　〒061－1405
恵庭市戸磯530－3

石井　幸子　〒041－1103
亀田郡七飯町藤域252－2

小松　信子　〒064－0808
札幌市中央区南8条西9丁目755－21

志田　秋子　〒004－0011
札幌市厚別区もみじ台東7－6－1

芦原日出国　芳子　〒004－0051
札幌市厚別区厚別中央1条7丁目10－16

佐野千津子　〒004－0834
札幌市清田区真栄4条3丁目10－17

中原　寿夫　〒062－0934
札幌市豊平区平岸4条6丁目4－18

堀　リツ子　〒063－0812
札幌市西区琴似2条7丁目1－20－801

石部セツ子　〒062－0035
札幌市豊平区西岡5条3丁目3－28

三浦美重子　〒006－0852
札幌市手稲区星置2条2丁目11－11

菊地まみ子　〒069－0842
江別市大麻沢町7－7

臼田　正　〒064－0913
札幌市中央区南13条西18丁目1－3

相田　直人　〒062－0922
札幌市豊平区中の島2条2丁目3－1－406

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）　郵便振替 02710－5－18287
〒060－0003　札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465